

知的障害者のアドボカシーとは何か？

～イギリス・メンキャップの取り組みから学ぶ

武居 光

《要旨》

1946年に結成されたイギリスの知的障害児者の親・当事者・支援者の組織 MENCAP は、約30年前から知的障害者を職員に採用し、わかりやすい言葉や文章を共通言語にしながら、彼らの願いやアイデアを事業に展開しているユニークな団体である。どのような経過を経てこのような「関係の成熟」が生まれたのだろうか。メンキャップのシンプルでわかりやすい言葉は新しい視野を開いてくれる。その歴史と現在の取り組みを現地取材した。

キーワード：イギリス 知的障害 アドボカシー 権利擁護 わかりやすい文章 シチズンシップ教育

はじめに

2018年6月、イギリス・バーミンガムで3日間にわたって開催された世界知的障害者連盟（インクルージョン・インターナショナル、115か国から200団体加盟）の世界会議に参加したとき、親や専門家がわかりやすい言葉を使い、知的障害のある参加者とのコミュニケーションを生まれやすくしていることに日本との違いを痛感した。

3日間の会議を貫いていたものは nothing about us, without us（わたしたち抜きで決めないで）という障害福祉の世界では有名な言葉の地道な実践で、世界会議という象徴的な場所ゆえかもしれないが、それは知的障害者のための支援をこえて、人間同士が誠実につきあおうとするエチケットを感じさせた。

この世界会議を開催したのはイギリスの知的障害児者の親・当事者・支援者の組織 MENCAP（以下、メンキャップという）であるが、知的障害者がリードしながら親、支援者と共に大会運営を行う姿が際立っていて、どのような経過を経てこのような「関係の成熟」が生まれたのか、その理由を知りたくて、ぜひ一度メンキャップを訪問したいと思い、2019年9月にプロジェクトの一環としてメンキャップを1週間訪問した。

実際に行ってみると、知的障害者自身の意見が時間をかけて聞かれ、さらには知的障害者がメンキャップの職員に採用され、健常者職員は彼らとともに事業を企画し、実践を展開していることは、平凡な言い方であるが驚きの連続であった。

以下には知的障害者のアドボカシー取材報告として、1. メンキャップの歴史、2. 重度重複障害者のアドボカシー、3. メンキャップが取り組む中学生のシチズンシップ教育の順でお伝えする。

1. メンキャップの歴史

発足当時のメンキャップ

創設者のフライド（右）によると1946年当時、この国の知的障害のある子どもたちには入所施設か、病院か、自宅か、その3つしか生きる場所がなかった。1950年、最初の自主事業は、親の休養のための障害児の一時預かり（レスパイト）サービスだった。ロンドンから北西にあるランカシャーのオーチャードデーンという町の中にある一戸建ての家を使ってレスパイトホームを開所した。



1952年の機関誌「ベアレンツボイス」で「政府は知的障害者政策を医療から教育ヘシフトせよ。そしてサービスは、コミュニティケア（在宅支援）を基本にせよ」と訴えた。

1955年から二番目の自主事業として、在宅知的障害者向けサービスとトレーニング（訓練）に着手した。

1970年代になってもメンキャップは依然「知的障害者福祉のテーマは医学モデルから教育モデルへ移行だ」としている。その背景には、当時の知的障害者専門病院における入所者への劣悪な処遇や職員による虐待問題があった。（注1）

「ついに本人の声を聴かなければならない日がきた」

1974年、メンキャップは知的障害のある当事者ジョイ・ディーコンの自伝「tongue tied（うまくいえない）」を出版して、それがニュース番組などに大々的に取り上げられ話題になった。

ジョイは幼児期に重度の知的障害と思われ、若くして他界した母親の死後はセントローレンス病院（ロンドン）での生活をしていた。そこで同じ障害をもつ仲間や理解ある支援者を得たことを契機に、病院を出て生活する人生を送った。

この出版をサポートした精神科医のジェフリー・ハリスは「ついにケアをしている人たちの声を聴かなければならない日がやってきた。彼らのニーズにあった支援をするためには、私たちは利用者に会議出席を求め、支援計画づくりに参加してもらう必要があると気づいたのです」と書いた。（注2）

そのころ（1976年）、日本でも自己主張を行う初めての脳性まひ当事者団体「青い芝の会」が発足。70年代に世界を覆った反権威的な市民運動のうねりを感じる。

一方、政府は地域福祉計画において、日本の地方自治体のお手本にもなった有名な「シーボーム報告」（1968年）を出し、「地方自治体に、ジェネリック（総合的）なソーシャ

ルワーカー配置」を提言した。さらに「脱入所施設」を進めるためには、「教育、地域福祉、当事者参加」の3つのチャレンジが必要だと提案した。

そのころメンキャップは職員に知的障害のある人を迎え入れ、これがメンキャップにとって当事者参加の萌芽であった。

リトルステファン問題

メンキャップ運営に本格的に当事者の声が反映されるようになったのは1983年からだった。きっかけは、エセックス州にある知的障害者グループがメンキャップが会のシンボルマークに使っている「リトルステファン」の使用中止を訴えたことだった。

Little Stephen Mencap Logo used 1950s to 1980s



「この小さな子どもは、私たちが、捨てられて、あわれで、ひとりぼっちで、かなしくて、みじめ、と受け止められる。メンキャップがこのマークを使い続ける限り、私たちは人の心を変えることはできない」という強い抗議だった。

しかし地方には「哀れなりトルステファンだから寄付が集まる」と思っている人が少なからずいたため、重要な抗議ではあったものの、急には変わらなかった。

1992年の大転換

それから約10年後、1990年代に入ると、メンキャップは、知的障害当事者団体「ピープルファースト」から届いた手紙を機関誌に掲載した。

「メンキャップが使っている mental handicap と learning disability という言葉を使わないでほしい。使うなら learning difficulty がよい」。

さらにダウン症協会は、メンキャップがなかなか当事者の要望を受け入れないことに対して「メンキャップは、親や支援者からも支持を失っている」と批判した。

こうした新しい当事者運動や親の会運動からの批判を受け止めて、1992年メンキャップはついにリトルステファンを廃止した。批判からおおよそ10年かかった。

うってかわってメンキャップは、リトルステファンに変わるキャンペーンシンボルを発表した。リアルな5人の当事者の堂々とした写真を使って、知的障害の多様性（年齢、性別、人種、未婚、既婚など）を示した。さらに mental handicap はやめて、learning disability もしくは learning difficulty としたのだ。

のちに1992年は「メンキャップが知的障害のある人たちのための組織から、知的障害のある人の組織への大転換した年」と言われた。

1998年の人権法と2005年の自己決定法

メンキャップは、ピープルファーストなどの当事者団体から影響を受けながら、ついに1992年に当事者中心の団体にリニューアルした。しかし彼らは親と対立したわけではなく協議体、共同体としてより厚みを付けた形になった。

この時期からイギリスには障害者の人権についての重要な二つの法が生まれていく。1998年のヒューマンライツアクト（人権法）、2005年のメンタルキャパシティアクト（自己決定法）だ。このふたつの法律（後述）は、新生メンキャップにとって事業展開の根拠になっていく。

知的障害者の当事者運動の歴史と定義

ここで少しイギリスから離れて、世界の知的障害者の当事者運動の動きを見ておこう。

オーストラリアの当事者団体「セルフアドボカシー・シドニー」のホームページによると知的障害者の当事者運動の始まりは1969年のスウェーデンで、知的障害者たちが「自分たちをどのように扱ってほしいか」を訴えたのが始まりといわれている。

その3年後にイギリス、アメリカと続くが70年代はまだ少ない。

しかし1980年代以降になるとオーストラリア、ヨーロッパ各国に広がり生まれ、2018年には非常に多くの国に生まれている。

1969 Sweden (The members spoke up about how they wanted to be treated)
1972 Britain
1974 United States
1980 Australia
2018 Canada, Poland, Germany, Malaysia, New Zealand, Australia, Austria, Hong Kong and many more countries

同ホームページによれば、知的障害者のセルフアドボカシーグループの定義は以下のとおりだ。権利主張やサービス改善要求だけでなく、仲間同士の助け合いや自己学習活動、他の団体とのネットワーキングなど多様性を含んでいる。

Self-advocacy groups are about:

- Speaking up about our rights (自分たちの権利を主張する)
- Having a say about the services we want and need (自分たちに必要なサービスについて意見をいう)
- Working together to make change happen (変化を起こすためともに行動する)
- Helping each other (お互いに助け合う)
- Standing up for others (ほかの人のために立ち上がる)

- Meeting new people (新たな人々と話し合う)
- Strength in members (仲間の力)
- Working with governments, services and the community (政府、サービス提供組織、コミュニティの人々とともに動く)
- Learning new skills (新しいスキルを学ぶ)
- Networking with other groups (ほかのグループとつながる)

日本では当事者運動によって「精神薄弱」の用語が廃止された

ちなみに筆者は1990年代の日本の本人活動の草創期10年間にかかわった。

契機は1990年にパリで開催された世界知的障害者連盟世界会議に3人の知的障害者が参加し、帰国後に自分たちの意見を発表したことがきっかけになって、全国の親の会が場所の提供や人的、資金的支援など当事者活動のサポートを始めた。

彼らは翌年の1991年の東京大会に初めて本人部会を設置運営し、その決議文で国に対して「精神薄弱と聞くとドキッとします。別の言葉に変えてください」という声をあげた。

その当事者の声を親の会が全面的に支援したことで運動が本格化した。本人参加による編集会議の企画による「わかりやすい本シリーズ」の出版や毎年親の会全国大会にあわせた当事者部会の開催など多岐に及んだ。(注3)

先の要望は、1998年に、国が「精神薄弱」から「知的障害」へ法律用語をすべて変更したことで実現した。私はこの間の当事者グループの支援者として関わった。現在は全国組織がなくなったため「わかりやすい本」の出版活動などは途絶えているが、地方において知的障害者の当事者活動は続いている。

新しいメンキャップのビジョン

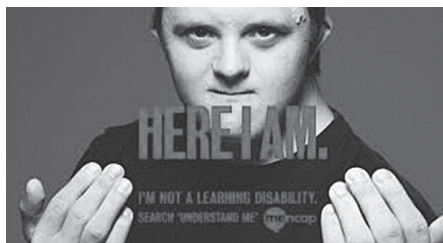
再びメンキャップの話に戻る。現在、メンキャップは組織のビジョンを次のようにいう。

「私たちのビジョンは、知的障害のある人が、平等に価値ある人として扱われ、意見を聞かれ、みんなとともに暮らす世界です。わたしたちの活動は、すべてこれを実現するためです」(注4)

メンキャップは多様なパンフレットやYouTubeを使った動画配信を通じて、知的障害者の人権普及を活発に行っている。当事者が参加して進めているプロジェクトには現在つぎのようなものがある。

- ・ Friendship relationship program (仕事が終わったあとにスタッフといっしょにパブにいたり、音楽を聴いたりして、人間関係のつながりを強化する目的)
- ・ Treat me well (知的障害者が病気になった時病院に適切な対応をしてもらうように啓発したり研修したりするプログラム)
- ・ Employ me (雇用をすすめる活動で、訓練期間や支援つき雇用などの多様な形態があることを企業に伝えている)

- ・ Here I am (知的障害者の存在、知的障害者の尊厳を啓発するもの。メンキャップ・マラソン部の Here we are London は、ロンドンマラソンに参加して知名度を上げる作戦。マカトンサインも使い注目を集める)



こうした様々な啓発活動に共通することは、次のような情報を伝えることだ。

- 知的障害は人の「一部」にすぎない
- 知的障害は個人と社会との「間」に起きる
- 社会の偏見によって障害は「大きくなる」
- 社会の態度や支援によって障害は「小さくなる」
- インクルージョンによって「だれもが住みやすい社会になる」

障害者が人間であることを保障する二つの法律 = 人権法と自己決定法

このような考え方を法的に支えるのが、先に触れた human rights act ヒューマンライツアクトと mental capacity act メンタルキャパシティアクトだ。どのような法律か、メンキャップが作ったわかりやすい資料から引用する。(注5)

ヒューマンライツアクト 人権法 1998

人は、だれでもつぎのような権利もっています

- 他人から傷つけられたり、ひどい扱いをされてはならない権利
- 家族と暮らす権利、家族と会ったり手紙を書いたり、話すことができる権利
- あなた自身である権利、あなた自身のことはあなたが決める権利
- ヒューマンライツアクトは、あなたのケアや支援をする人たちが守らなければならない法律です

メンタルキャパシティアクト 自己決定法 2005

- あなたが使うサービスは、あなた自身で決める必要があります。
- そのためにはわかりやすい情報を手に入れて、だれかがわかりやすくしてあなたに説明します。
- あなたが自分で決めることをいつもあなたの周りの人たちがサポートするべきです。
- もし決定する内容が難しすぎる時は、あなたにとっての最良の判断がなされるべきです。
- 「最良の判断」とは、あなたにとっていちばんいい決定のことです。
- あなたにとって「最良の判断をする人」は、あなたの意見を聞かなくてはなりません。また、あなたの家族やあなたの支援者の声もきかなくてはなりません。
- もしその決定があなたやあなたの家族にとってハッピーでなければ、あなたは別の方法を選ぶことができます。

ご覧のように、この二つの法律は、障害のある人の権利とサービスの役割、そしてそのサービスはサポートされながらも本人が決めると規定している。

とくに自己決定法は、支援者が当事者の声を聞くことを法的に保障している。「意思表示を聞かれること、支援されることが知的障害者の重要な権利である」と定める法律は世界に類がない。

アドボカシーは、代弁ではない

こうした法律が生まれた背景には、イギリスにはアドボカシーサービスが児童、障害児者、外国人、老人等のための公的サービス（ボランティアサービスや有料契約サービスもあり多様）としてかなり古くから存在していることが大きいと思われる。

メンキャップやマインド（精神障害者支援団体）のパフレットからアドボカシーの説明を引用しよう。私たちの想像と少し違うことに気がつく。

（メンキャップ）

Advocacy アドボカシー

- Advocacy is when someone supports you to speak up and say what you want.
アドボカシーとは、だれかがあなたが発言することやあなたが自分のほしいものを自分でいうことを支援することをいいます
- We can help you to speak up about the things that are important to you.
わたしたちは、あなたにとって大切なことを、あなたが自分で発言することを助けることができます
- We can help you to know about your rights.
わたしたちはあなたが自分の権利について知ることを助けることができます
- We can speak up for you if you find it hard to say what you think and feel
わたしたちはあなたが感じていることや考えていることを、自分でいうことがむずかしいときに、あなたのかわりに発言することができます

“About the support and advice we can give you” より引用

（精神障害者支援団体マインド）

What does an advocate do? アドボケイトは何をしますか？

- The role of an advocate depends on your situation and the support you want. But they are there to support your choices.（アドボケイトの役割は、あなたがおかれている状況によって異なります。あなたが求めることをサポートします。アドボケイトはあなたの選択を支援するためにいます）
- An advocate can:（アドボケイトができること）
 - listen to your views and concerns(あなたのものの見方や関心事に耳を傾けます)

- help you explore your options and rights without pressuring you (プレッシャーをかけないで、あなたの選択肢と権利を見つけるのを助けます。)
- provide information to help you make informed decisions (あなたが情報を得て決定するための情報提供をします)
- help you contact relevant people, or contact them on your behalf (あなたが関係者と連絡するのを助けたり、あなたの代わりに連絡をとります)
- accompany you and support you in meetings or appointments. (あなたにつきそい、ミーティングや面会をサポートします)

アドボカシーは日本では「代弁」と理解されているが、イギリスでは「ともに活動すること」や「発言を支援する」という意味が込められている。そして、アドボカイトは、次のようなことは絶対にしないと約束する。

★ An advocate will not: (代弁者が絶対にしないこと)

- give you their personal opinion (個人的な意見をあなたに与えること)
- solve problems and make decisions for you (あなたに代わって問題を解決したり、決定を下すこと)
- make judgements about you. (あなたについて判断を下すこと)

2. 重度重複障害者のアドボカシー

重度重複障害のある人のアドボカシーとは

2010年にメンキャブは、重度重複障害のある人のアドボカシーについても検討をはじめた。考え方やその取り組みを紹介する。(注6)

(1) 僕を巻き込んで (involve me)

政府の研究機関と共同研究した「僕を巻き込んで involve me」プロジェクトは実践事例を通じて重度重複障害のある人の意思を受け止める可能性をさぐった。

事例「マイケルのサポートワーカーはマイケルがプールで1対1の介助で泳いでいるところをビデオで撮影した。それを見るとマイケルの足はプールの中では普段よりも広い範囲で動いていることがわかった。スタッフにとってこの発見(水の中ではマイケルが自分の足を思うように動かすことができる)は、彼の日常生活上の決定について、マイケル自身の影響力を強めることになる」

「僕を巻き込んで」は、意思表示が乏しい人に対して、私たちが抱きがちな「どうせ聞いても答えは返ってこないという思い込み」への警告である。重度重複障害のある人の支援は、関係者がそれぞれに得た確かな情報を持ち寄るという基本の上立つ必要がある。

(2) アドボケイトの役割

- ①その人が自分で伝えることを助けること
- ②その人の人権を保障すること
- ③その人の最善の利益を伝えること
- ④その人に必要な支援を手に入れること

(3) アドボカシーがあるとは、その人が社会から排除されていない証拠

「アドボカシーがある」ということは、人が「社会から排除されていない、無視されていない」という証拠である。そのとき、アドボケイトが留意すべきことは3つある。

- ①障害者がインクルードされているか？（排除されていないか？）
- ②まわりの誰かがその人の話を聞く関係にあるか？
- ③障害者がまわりの人から敬意をもって接せられているかどうか？

(4) 非指示的、継続的、仲間アドボカシー

重度重複障害のある人は、自分からアドボカシーがほしいとは言えない。彼らには「自分に代わってだれかにアドボカシーサービスにつなげてほしい」というニーズがあり、「自分にとって何が大切か」を伝えるアドボケイトを求めている。

これを non-instructed advocacy 非指示的アドボカシーという。また単発的にかかわるのではなく、continued advocacy 継続的アドボカシーが求められている。そういう条件を満たす存在として、この事例のような peer advocacy 仲間アドボカシーが重要な存在になる。

ピアアドボカシー事例：知的障害のあるキミーは、セレナという重度重複障害の女性のピアアドボケイトをしている。キミーはセレナといっしょに料理教室に参加し、セレナが膝の上にボウルを置いて調理をすることは難しく、また彼女は自分の服が汚れることを嫌がっていることに気づいた。キミーはこの発見を彼女のサポートワーカーに話し、次の料理教室で彼女のために低いテーブルと上着を用意したらどうかと助言した。このことからわかるように重度重複障害のある人のアドボカシーには「体験の共有」が欠かせない。

(5) アドボカシーとはその人にとって何が大切か、証拠を集める人

アドボカシーの重要な役割とは、個人に代わって決定することではなく、その人にとって何が大切か、証拠を集めること。たとえば、その人が好きなこと、嫌いなこと、そう感じる人や場所を知ることが重要である。アドボケイトは、どのような決定であってもその視点を抜きに決定された時には、「違います」と指摘する義務がある。

(6) 自治体の担当者は重度重複障害のある人のアドボカシーニーズを調査すべきだ
サービス事業者はスタッフにメンタルキャパシティ法の研修をするだけでなく、実際に

重度重複障害のある人が自己決定をしている様子や、サービス計画へ参加支援されている実例を見せていく必要がある。そして市町村の福祉サービスの責任者は、定期的に地域内に暮らす重度重複障害者のアドボカシーニーズを調査すべきである。

アドボカシー、それは礼儀であり敬意

メンキャップによる重度重複障害者のアドボカシー研究を紹介した。

レポートの中で強調されていたのは、その人が求める暮らしに「たどり着くまでのプロセスが重要」という感覚である。

これは月並みなたとえであるが、イギリスで相手からコーヒーなのか紅茶なのか水なのか？紅茶ならミルク入りか？砂糖いりか？両方いれるか？何もいれないか？ひとつひとつ聞かれた体験と重なる。

相手を人間として接するとは、勝手に決めないということが礼儀（相手を人間として扱う）の文化なのだろう。アドボカシーはこの対人文化の中にあると思われた。

アドボカシーグループ Don't screen us out による定義

ダウン症児の出生前診断が国連の人権条約に違反しているという視点から、英国内で人権啓発にとりくむアドボカシーグループ Don't screen us out のリーダーの次の言葉は、アドボカシーの意味を一層鮮明にしてくれた。

- 親は子どもへの apologize（謝罪）をやめて、子どもの advocate（権利擁護）をしなくてはなりません
- アドボカシーとは、ポライトネス（礼儀正しさ）であり、敬意を示すことです

3. メンキャップが作るシチズンシップ教育

社会統合政策としてのシチズンシップ教育

イギリスの福祉システムは、わが国に比べて民間団体のボランタリーな活動領域が広い。そしてその資金源であるが、イギリスの調査では国民の78%が寄付をしており、一人当たりになおすと年間寄付額は183ポンド（25,300円）である。社会福祉も含む公共活動は、伝統的にこのような活発な寄付文化と市民意識の上に乗っている。

以下に紹介する公教育における取組みは、サッチャー時代に生まれた格差拡大という負の遺産を修復するために、ブレア政権時代に始まった社会統合政策の目玉事業だ。

それはシチズンシップ教育と呼ばれる2002年から中等教育において必修教育になった義務教育の新しいジャンルで、中学校教育の中に正式の授業として本格的に導入されている。

そのキーコンセプトは表のとおりであるが、日本で社会福祉士資格に求められるレベルの知識を、イギリスでは中学生から学んでいることに驚く。(注7)

キーコンセプト	カテゴリー	学習テーマ
民主主義と独裁政治 協力と対等・平等と多様性 公正、正義、法、人権 自由と秩序・個人とコミュニ ティ・権力と権威 権利と責任	価値	公共善への関心 人間の尊厳と平等 共感的理解をもった他者のための活動
	スキルと能力	他者と協力し効果的な活動ができる能力 他者の経験や考え方を認める能力 他者の観点を寛大に取り扱う能力

メンキャップは、シチズンシップ教育を実施する中学校から委託を受けて、知的障害のある生徒とない生徒がともに学びあう授業プロジェクトを展開している。

「オール・イン（みんないっしょ）」

イギリスでは学齢期の知的障害のある子どもがいじめにあう可能性は、知的障害のない子どもの2倍という調査報告がある。メンキャップでは教育・心理の専門スタッフが中心になって学齢期にある障害児と健常児の関係の発展を促す実験的な取り組みをしている。

このプロジェクトは公的な財政的支援を受けている。またこの事業は、政府 ofsted が学校の機能を調査・評価するときのポイントになる。(オフステッド: office for standards in education: 1992年発足の英国政府の非省庁部門で、教育機関の監査を担当するほか、保育、養子縁組、養育機関、教師教育を検査する。ウィキペディアより)

オール・インは8歳から13歳までの子どもを対象としたインクルーシブなスクールプロジェクトで2016年から地域の大学と連携してはじめた。ベースにある理論は「コンタクトセオリー」、つまり「接すれば接するほど人は仲良くなる」、「やればやるほどお互いが快適になる」という理論に基づいている。

週1回1時間、全12回の多様なプログラム

特別支援学校に通う知的障害のある生徒10人と通常学校に通う障害のない生徒10人が20人で一つのチームになる。なるべく近くの学校をペアにして、1学期間（10週間から12週間）、週に1回1時間、一緒に趣味、フィットネス、ライフスキルなどの活動を一緒に行う。プログラムを通じて、ひとりひとりの子どもの態度がどんな風に変化し、どのように友情が生まれるかを評価する。

例えば趣味では、合唱、アート、工作、園芸、ドラム、写真、映画づくり、演劇。フィットネスでは、水泳、ダンス、ジム、卓球、オリエンテーリング、ロッククライミング。ライフスキルでは、救急救命、お金の管理、安全で独立した旅行、健康な食事、マカトン（サ

イン言語) などだ。学期の終わりには先生とか親とか他の友達を招待するセレブレーションイベント(発表会)をやり、ショーケースに成果物を飾ったり、演劇をしたり、料理をする。

進行役は、学校の先生

このプログラムは授業時間内でも放課後でも、どちらでもよく、学校が決める。グループのファシリテーターは学校の先生。内容によって外部の先生を招く。例えばダンスだったらダンスの先生を外から連れてくる。場所は、どちらかの学校でやる場合や、地域のどこか(例えばアートギャラリー)でやることもある。多くの場合、申し込み時に2つの学校がペアで申し込むことが多いが、そうでない場合、距離的に近い学校同士を選ぶ。プロジェクトが終わった後も、交流を続けることを勧めている。

生徒が得るもの

セレブレーションイベントでは、生徒にメダルをあげたり、賞状をあげたりするが、子どもたちはあまりそのような経験がないので、すごく喜ぶ。もともとは障害のある子どもにとって恩恵があると考えてスタートしたプロジェクトだが、障害のない子どもも恩恵を得ている。そのため10人を選ぶ時に、すごくシャイな子どもを選び、いい効果がみられたこともある。

学校が得るもの

イギリスの義務教育は、ソーシャルスキル重視の時代になっている。このプロジェクトは公的な財政的支援を受けているが、オフステッドに学校を調査・評価される時、学校はオールインプロジェクトを一つの例として出すと、学校全体にいい評価が与えられる。もともと学校はアカデミックなことに焦点をおいていたが、最近ではソーシャルスキルの重要性を認識してきているので、その意味でこのプロジェクトはとても意味がある。熱心に担当したことで昇進する先生もいる。

「オール・ムーヴ(みんなで体を動かそう)」

活動内容は、より身体的な、スポーツ活動に焦点を絞っている。基本的にはオール・インと同じ考え方に基づく。対象は、11歳から16歳の中・高生の子どもたちで、障害のある子ども10人、障害のない子ども10人の20人で一つのチームを作る。

メンキャップは、これとは別に「ラウンド・ザ・ワールド・チャレンジ・プログラム」というスポーツプロジェクトがあって、この対象は障害のある人たちだけだが、そこと一緒に活動しようとすることもある。ラウンド・ザ・ワールドというのは、例えば40時間活動したらヨーロッパを旅行したとみなすというようなやり方だ。

ロンドンマラソンにちなんで26時間

オール・ムーブの考え方はオール・インを参考にし、スポーツの部分はラウンド・ザ・ワールド・チャレンジを参考に、ロンドンマラソンにちなみ、マラソンが26マイルなので26時間やる。現在はロンドン、カーディフ、ブラットフォード、コーンウエル、エセックス、バーミンガム、この6か所の学校でやっている。

3つの中心原則 = イコール、継続、スポーツ

メンキャップが、大切にしたいと決めている中心原則は3つある。第1は、イコール。10人対10人は明らかなイコール。基盤が同じ水準に保たれるようにということ。普通学校と特別支援学校と一緒に活動するというのは特に新しい考え方ではないが、今までのやり方は、通常学校の障害のない子どもが特別支援学校に行って、障害のある子どものお世話をしたり、リーダーになるという形だった。でもそれはここでは起こって欲しくない。お互いが対等であることを重視したい。

第2は、継続。まとめて何時間もやるのではなく、26週間をかける。

第3は、スポーツ。フットボールとかラグビーなどはこれまでやってきているが、ロッククライミング、サーフィン、ローラーブレイディングなどを勧めている。できるだけみんなが初心者であるものがよい。活動は行って気持ちのいいもの、またやりたいと思うようなものだとすることが大切。

メンキャップのスタッフは、1学期に1回ぐらいどんなふうに行っているのかをみにいく。生徒や先生がこのプロジェクトについて言っていることが本当かどうか、外側からの見方が必要だ。

質疑応答；私たちは「違うこと」に焦点を当てたいのではない

Q コンタクトセオリーで、触れ合うことでどのような変化があるか？

A お互いに、成熟性と共感力を増していると思う。

Q 通常学級にいる障害のある子どもがどちらのグループに数えられるのか？

A もし普通学級に支援のいる生徒がいる場合は、多分その人は選ばれない。

Q 選ぶとか選ばれないとかいう言葉が出てくるが、基本的には子どもが手をあげるのか、先生が選ぶのか？

A 学校によって様々だが、多くの場合先生が選んでいる。たまにはそうではないところもある。スケジュールによって、学校の時間外にやる場合もあるのでそういうことも影響してくる。

Q 障害のある子どもに対してネガティブな態度の生徒がこの活動を通じて変化したと

いう事例があるか？

A 絶対に起こっている。ナスティ（意地悪）というほどではないけど、あんまり尊敬してないなという男の子のグループがあったが、最後の方ではとてもよく遊んでいるのを見た。今年も行っている最中なので、そういうエビデンスが得られるのではないかと思う。

Q この活動に入る前に、障害のない子どもに知的障害のことを説明するのか。するとしたらどんな風になっているのか？

A 説明はしない。なぜなら私たちは「違うこと」に焦点を当てたいのではなく、彼らが対等な立場で出会ってもらいたいから。ここでは、障害ない子は、ボランティアとかサポーターではない。障害は強調する点ではないから。

障害児の社会性を伸ばすための取り組みは日本ではさまざまな技法が講じられてきたが、イギリスのように健常児の社会性を伸ばす取り組みが重視されていることはない。これは新鮮であった。個人の幸福は、差別や不寛容によって大きく損なわれる。このことを理解する市民を育てるのは、教育の重要な役割だ。社会福祉と教育を連続体として考える貴重な機会になった。

おわりに

今回のイギリス訪問では、知的障害者福祉の中でアドボカシーという日本にはない取り組みを調査した。それは知的障害のある人とわかりやすい言葉を使って会話することで、彼らの気づきやアイデアを受けとめ、希望や将来を共有する営みのことであった。

そのような共同作業において知的障害のある人たちは、「支援する・される」という関係ではみせない、積極的で、有能で、リラックスしている姿をみせており、それは今後の私たちに、とても必要な関係に思えた。

最後に、今後の私たち支援者、教育関係者の課題を記すと以下の3点になると思われた。

1. 私たちは、知的障害者の体験や意見に関心を持ち、「彼らとともに」社会のあり方を考えていくこと
2. 私たちは、知的障害者が受けている偏見や差別を、彼らの言葉で共有し、「彼らとともに」その解消に、社会啓発や支援者教育をはじめ、さまざまな領域で連帯をひろげて取り組むこと
3. 私たちは、知的障害者に意見とアイデアを求め「彼らとともに」教育や福祉、医療など公共サービスをより公共的にリフォームすること

引用一覧

- (注1) Liz Tilley, Resistance in Mencap , Exploring Experience of advocacy by people with Learning Disabilities, Jessica kingsley publishers 2006
- (注2) Brian Rix, 1946-2006 The Royal Mencap society, All about us 2006
- (注3) 武居光, 知的障害のある人のための「わかりやすい本」制作活動の動き、障害保健福祉研究情報シスム <https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n218/>
- (注4) Mencap, Let's talk about learning disability
- (注5) Mencap, Your rights when you are living in the community
- (注6) Mencap, Raising our sights, how-to-guide 1 advocacy for people with profound and multiple learning disabilities, mencap. pml network
- (注7) 栗田充治「英国の市民教育」2000、文科省報告書2019

What Does the Advocacy of Person with a Learning Disability Means?

: A Report About the Practice of Mencap in England

Kou TAKEI

Mencap is an NGO for people with learning disabilities and their families in England, which has existed since 1946. Over the last 30 years, Mencap has employed people with learning disabilities as its staff members and they have been using easy language to share ideas and to promote articles to share ideas about powerful projects for people with learning disabilities in the community. This report describes how Mencap creates a mature relationship between non-disabled staff and staff with learning disabilities? The use of easy and simple words that Mencap uses for its staff provides a new vision for us. The history and activities of Mencap are described in this report.

Key word: England, people with learning disabilities, advocacy, easy words, citizenship education
